

事業の背景・目的

出水市で越冬するツルを生物多様性の指標であると捉えると、1万羽を超すツルが約半年越冬することができるのは、本市の生物多様性が比較的保全されているためであると考えられる。一方、越冬地である干拓地におけるツルの過密状態を解消するために取り組まれている給餌量削減に伴い、自然採餌の重要性も増すことから、市内の田んぼを含む湿地環境の保全再生が今後必要となってくることから保全再生のためのデータ収集を実施する。

事業の内容

事業① 物理環境・自然環境調査

- ・荒崎地区・野田地区の田んぼにて調査を実施し、その結果に基づき地域の実情、特色を踏まえた整備手法を明らかにすることができた。
- ・市民参加型で実施する整備手法
 - (1) ポリエチレン製波付U型を用いた魚道整備
 - (2) カスミサンショウウオ産卵期の移動ルート確保



事業② 市民参加型調査

- ・生物多様性に対する認識の向上を目的に市民参加による生物調査を野田田んぼにて1月28日に実施した。



得られた成果

- ・物理環境・自然環境調査の結果に基づいた整備手法を明らかにすることができた。
- ・市民参加調査のアンケート結果、参加者全員から湿地の大切さについて参加する前より大切であると感じたとの回答を得た。今後も湿地の重要性を周知するための調査、整備を市民参加型のイベントとして実施する。
- ・本年度、鳥インフルエンザによるツルの大量死が発生した。ツルが越冬する場所の確保は喫緊の課題であり、今回明らかになった調査結果及び整備手法は、国内の分散候補地を探すうえで、参考になると考える。